

フランスのメディアにおける「若者」の語り

—— 「暴動」をめぐる「排除」の言説 ——

中條 健志

◆要旨

フランスの主要な社会問題の1つに、郊外における「暴動」がある。それは、1980年代から多くの議論を呼んできたが、今日では「若者」の「暴力」、 「統合」、あるいは「社会的排除」の問題として語られている。2005年秋には、全国的な「暴動」が発生し、事件に関する多くの言説が生まれた。その中で、事件の1～2年後に出された、「エリート」（政治家）や関係者（市民、ジャーナリスト、著名人、支援団体代表、元警察官、市関係者）たちの言説を提示し分析することによって、そこで何が語られたのか、また何が「暴動」の「問題」とされたのかを明らかにしている。分析の結果として、まず各人の言説における特徴的な要素をそれぞれ取り上げた。それらを総括すると、「若者」が「排除」（異質な存在である暴徒の処罰）と「包摂」という2つの側面から語られていることが確認された。そして、言説と社会的不平等の再生産との関係性の解明を目的とする、批判的言説分析の立場から考察を試み、「使用」されることでより「権力」を帯びる「エリート」の言説が、フランス社会における「暴動」の「異質性」を強調し、「若者」たちの「排除」を正当化していることが分かった。

キーワード：郊外、暴動、メディア言説、社会的排除、批判的言説分析

(2009年9月18日論文受理, 2009年11月6日採録決定 『都市文化研究』編集委員会)

1. はじめに

本稿の目的は、2005年秋に発生したフランスの主要都市郊外における「暴動」をめぐる、その当事者とされた「若者」たちについての「語り」を批判的に検証することである。

フランスの「郊外」（バンリュー）における「暴動」は、1980年代前半に社会問題化する。そこでの、人々による投石や放火、警官隊との衝突といった現象はメディアの注目を集めた。当初は、郊外の住宅団地に住む移民ないし移民の子ども世代（以降）の人々が被るレイシズムがその原因として語られていたが、やがて、移民の子どもたちを「移民」と名指す事の問題性が認識されるようになると、「若者」という言葉がそれに取って代わり、「郊外の若者」が「暴動」の主人公として語られ始める。

そして、レイシズムだけでなく、郊外で顕著な失業や就学差別、貧困の問題などが公に指摘されるようになり、「暴動」は国家の社会福祉政策の機能不全に因るも

のとして認識される。しかし、1990年代に入り、暴力行為が激しさを増し始めると、事件の暴力的側面が強調されるようになり、それまで差別の「犠牲者」であった郊外の若者たちは、フランス社会に適応できない「異質な存在」と見なされ、「暴動」への警察権力の介入が正当化されるようになる。また、「若者」と「イスラム原理主義」との繋がりが「暴力」を生んでいるといった主張もしばしば為された。

このような、「暴動」における「若者」の存在は今日も重要なテーマとなっており、彼（女）らの雇用、就業差別、貧困といった観点から、郊外における社会的排除の問題が指摘されている。一方で、治安対策の名の下に、「暴動」に対する警察の介入強化を推進する議論も盛んに行われ、そこではフランス社会に「統合」されない人々の存在が問題視されている。

筆者は、「エリート¹⁾」の言説が持つ権力性に注目している。例えば、CHAMPAGNE (1991)、MILLS-AFFIF (2007)、SEDEL (2009) らは、メディアが「暴動」をセンセーショナルに伝えることによって、

「郊外」をより「問題化」したと指摘しているが、こうしたメディア言説の影響力を踏まえながら、クリティカル・ディスコース・アナリシス（批判的言説分析、以下CDA）という立場からヴァン・デイク(1988, 1991, 2006)が行った、「言説による『問題』の再生産」に関する研究を方法論的枠組みとし、「2005年秋」を事例としながら、「暴動」をめぐる言説と、そこで語られる「若者」の「排除」の問題を検証する。

本稿での言説分析は、言説に内包された権力関係を批判的に分析するCDAという立場から行われる。ここでは、言説のイデオロギー性とそれによる「問題」の（再）生産に焦点が当てられ、言語形式から引き出される表面的な意味だけにとらわれず、言説のコンテキストとそこに埋め込まれた潜在的な意味を社会認知的なレヴェルで読み取ることが目標とされる。

言説の相互作用性とコンテキストの役割を重視する、言説分析の機能的なアプローチであるCDAは、提示された言説に「内在」するものを分析するという意味での言説分析とは異なり、言説を社会的実践として捉え、それがどのように社会文化的に「表れて」いるのかに注目している。従って、「若者」がどのような語りの中で「問題」とされているかを検証するために、CDAを参照しながら以下に分析を試みる。

2. 「2005年秋」の概要

2005年10月27日の夕方、パリ北郊のクリシー＝スー＝ボワ市²⁾において、盗難行為を働いた若者グループが警察官から逃走する。その内6人は拘束され、尋問を受けるが、3人の少年が変電所内に隠れこむ。しかし、しばらくして彼らはそこで感電し、内2人が死亡、1人が重傷を負う。この事件に反応した他の若者グループが抗議のために、警察官や消防士に対する投石、また自動車への放火などを行った。

当初は市内及びその周辺部だけで展開されていた暴力行為が、やがて全国に広がり、「暴動」として国内外のメディアが大きく報道するようになる。事件は11月7日には概ね終息するが、8日には政府が非常事態宣言を出し、一部の地域では夜間外出禁止令も発令され、不穏な状況はその後もしばらく続いた。11月17日にフランス国家警察総局が、「暴動」がフランス全土において平常に戻ったと発表すると、一連の事件は落ち着きをみせる。

こうした郊外での「暴動」はフランスにおいては度々発生するものであり、「2005年秋」がとりわけ著しい被害や犠牲者を生んだという訳ではなかった。それにも拘らず、この事件は長期にわたって多くの議論を呼び、「2005年秋」をテーマにした研究書も多数刊行された。

それには次のような理由が考えられる。まず、長年続いてきた警察と若者との対立、緊張関係がピークに達したこと——事件の契機となった3人の少年の死は、警察官の追跡が原因と指摘されたが、警察側はこれを否定した——、ニコラ・サルコジ内務大臣（当時）が郊外の若者たちを「ゴロツキども」(racailles)と呼び、彼（女）らに対し挑発的な姿勢をとったこと、そして、悪化する一方の失業、貧困、差別の問題である。直接的な引き金は若者の死亡事故であるが、「暴動」の拡大にはこれらの要素が複雑に関係し合っている。

3. 言説資料

言説分析を試みるにあたり、そのソースとして筆者は「2005年秋」が発生した後に刊行された、BELMESSOUS (2007) 及び LY & GAY (2007) を取り上げる。これらはそれぞれ、「郊外」の市長と関係者らの発言から構成されている。BELMESSOUSの論考には、地域での「暴動」をめぐる、市長と著者、側近、閣僚、地域住民との対話が収録されている。³⁾ ここで市長の発言に注目するのは、「エリート」の言説に関するVAN DIJK (1991) の議論に基づいている。彼は、権力構造の内部で、他の集団や組織よりも比較的優位に立つ人々の発言が、政策や世論に大きな影響を与える、即ちそれらが強いイデオロギー性を持ち、社会的不平等の再生産に寄与する可能性を持つことから、「エリート」の談話を言説分析の対象としている。

LY & GAYは、「暴動」に関係したジャーナリスト、支援団体、著名人らの発言を取り上げている。ここでは、郊外の「若者」たちの行動に一定の理解を示す人々が対象となり、彼（女）らの異議申し立てが代弁されている。従って、この論考からは「暴動」に「対する」視点ではなく、「若者」から「社会」に対する視点を引き出すことができると考えられる。

「2005年秋」に関する数多くの著作の中で、筆者は次の理由からこれらの資料を選択した。それは、論考が人々の発言を中心に構成されているという点である。BELMESSOUS (2007) では、市長と関係者との対話がほぼ全文引用され、著者自身の考察は少ない。それは、著者による議論の展開というよりも、むしろ発言記録としての性格を持っている。LY & GAY (2007) では、著者の論考からは独立した形で複数の人々の発言が紹介されており、「2005年秋」に関する個人の見解を確認することができる。発言は全文引用され、考察や補足は加えられていない。新聞雑誌や「論文」形式の論考では、発言の一部が引用される場合が多く、それが選択された理由や、発言の前後を確認することが難しい。従って、発

言（言説）が比較的加工されずに提示されている⁴⁾という点で、筆者の資料選択には一定の合理性があると考えられることができる。

4. 市長の語り

4.1. グザヴィエ・ルモワンの視点

まず、クリシー＝スー＝ボワ市に隣接するモンフェルメイユ市⁵⁾の市長、グザヴィエ・ルモワンの発言を中心にみていきたい。彼は2002年に市長となり、同時にクリシー＝スー＝ボワ・モンフェルメイユ都市圏共同体の代表も2005年から務めている。所属政党は政権与党のUMP（国民運動連合）⁶⁾である。

BELMESSOUSによれば、インタビュー時も市内では警察官への投石や自動車への放火が度々発生していたという。そうした状況について、彼は次のように話す。

うんざりです。もう1年も続いています。市は1年も緊迫しています。あの若者たちは今日何の処罰も受けません。2005年秋の暴動の後、セヌ＝サン＝ドニ県でどのくらいの暴徒が捕まったかご存知ですか？ [中略] 3人ですよ！可笑しいと思いませんか？

公道にゴミを捨てたり、路上施設を破壊したりする全ての者たちを処罰しなければなりません。

これは警察の問題ではありません、というのも、私に言わせれば、警察はちゃんと自分たちの仕事をやっていますが、それは司法の問題で、司法は自分たちの仕事をやってないのですから。

ここでルモワンは、「2005年秋」から続く市の混乱に悩みながら、「暴徒」が罰せられないことに憤りを感じている。彼が考える対応策は「処罰」を行うことである。但し、司法に対する批判を見る限りでは、ここで言われる「処罰」とは、警察によるものではなく、「暴徒」逮捕後の法的制裁を意味している。つまり、警察の介入自体は問題にされていない。

ルモワンは治安対策という視点から「暴動」を見ている。次のような発言もある。

彼らは、自分たちが最悪のことを望んでいると言っています。ですが、最悪とはどういうことなのでしょう？ 理解できません。私には、彼らが何を望んでいるのかが分かりません。我々の治安対策がしっかり実行されなければなりません。

ここでの「彼ら」は、初めに挙げた発言の中の「若者」を受けている。ルモワンは「彼ら」の行動を理解す

ることができず、問題を治安対策によって解決すべきものとして捉えている。こうした彼の姿勢が強硬なものであることが窺えるコメントとしては、次のようなものがある。

私は、危ない犬どもが口輪もせずぶらついているのに、市警が、そいつらの飼い主から調書をとらなかつた理由を知りたいものです。[中略] そこには法律があり、あなた方はそれを彼らに尊重させなければなりません。[中略] 彼らの飼い主から調書を取り、犬を捕まえなさい。

ルモワンは若者たちを「犬」に、彼（女）らの親たちを「飼い主」に喩える。市警の関係者に対して放たれたこの発言は、用いられるタームの問題性もさることながら、彼が若者たちを「捕まえ」、管理するものと見なしていることを明らかにしている。

では、彼は「暴動」の問題点としては何を考えているのだろうか。そのことについての言及がある。

彼らの難題を解決するための経済的、人道的手段の問題は、ささいなものです。これらの地区の問題は、文化レベルのものです。

[中略] 市が被っている問題は、社会経済的なものではなく、社会文化的なものだからです。私は敢えてそう言います。何故なら、そう考えているからです。

1つ目の発言では「文化レベル」、2つ目においては「社会文化的なもの」が問題とされている。この「文化的」なものが何を意味するのかは、前後の発言でも具体的に示されていない。一方で、ルモワンは「文化的」な点を挙げる代わりに、「経済的」、「人道的」なものを否定している。こちらは比較的把握しやすい。とりわけ、「経済的」な観点からの問題の改善とは、当該地域への公的資金援助や失業対策などをあらわすものと考えられる。彼にとっては、そうした「経済的」なものより一層重要な、「文化的」な問題が地域に存在している。

この「文化的」問題についての言明は、この論考の中では見られない。しかし、ある日に行われたルモワンとクリシー＝スー＝ボワ市長（クロード・ディラン）、表敬訪問中のロシア副大統領との会談において、この点に関してある程度踏み込んだ発言がある。以下に引用する。

副大統領

何故あなたがたのところには、これほどまでの外国人密集地域があるのですか？ 彼らは不法移民ですか、それとも合法移民ですか？ フランス政府はこの種の人々を必要としていたのですか？

ルモワン

差し当たって、私にはコンセンサスのないひとつの見解しかありません。我々は、今日、暴力的かつ民族的大変動の只中で、我々のものと同じようなコミュニケーションの中にいます。ですから、私たちが経験している問題は、経済的、都市的、社会的措置によってではなく、国家全体にかかわる政治的選択によって解決されると思います。例えば、長い間フランスで生活しているにもかかわらず、相変わらずフランス語を話さない外国人家族は、フランス文化に適応しなければならないと思います。[中略]

ディラン

私のほうは、この地区に住む若者たちの失業問題を強調したいです。私のコミュニケーションの失業率は、国全体が8%であるのに対して24%です。[中略] 文化的諸問題もまた難題の一つの要素ですが、それらは難題ではないのです。

副大統領は1年前から続く「暴動」を受けてこうした質問を投げかけている。無論、彼の言う「外国人密集地域」や「移民」という表現は慎重な理解を必要としている。「外国人」とは、原則的にフランス国籍を保持しない者を指すが、そうした人々が集住する地域の存在は明らかなものではなく、仮に存在していたとしても、その事と「暴動」とが関連付けられる理由がない。また、「移民」という言葉は、それが語義通りに出身国に出自を持つ移民のみを指すのか、あるいは彼（女）らの子ども世代（以降）をも含むのかという問題を孕んでおり⁷⁾、その点を整理しない限り「不法」か「合法」かについての議論は成立し得ない。当然、このことも「暴動」との繋がりを指摘する材料にはならない。

副大統領がこうした発言を行った背景には、「郊外」や「暴動」に対する一面的な理解があったと考えられる。⁸⁾ 「2005年秋」を報道したフランス国外の多くのメディアが、国内のそれと正反対に、「暴動」を「移民問題」として伝えたが（中條, 2009）、この事と彼の発言は共通する部分がある⁹⁾。

これに対してルモワンは、「コンセンサスのない」と前置きしながらも、「民族的大変動」という表現で事態を説明している。フランスでは、平等主義に基づく共和国原理に則り、出自や信仰に拠る統計調査はタブーとされており、そのことは人々を——少なくとも公的な言説においては——、共和国の国民は全て「フランス人」であるという前提に立たせている。そうした意味で、この「民族的」という言い回しは非常にデリケートなものである。即ち、彼は「民族的」に「フランス人」とは「異なる」存在をここで示唆している。

その事を端的に表すのは最後の発言である。「外国人」という言葉の解釈についてはここでは追究しないが、「フランス語を話さない」人々は「フランス文化に適応」しなければならないという主張は、同化主義以外の何物でもない。そして、ここで同化が語られるということは、彼が「同化すべき存在」、つまり「(完全に)フランス人ではない」人々を問題視していることを意味している。しかしながら、この議論と「暴動」との関連性を裏付けるものは何も示されていない。

「2005年秋」の主要な舞台となったクリシー＝スー＝ボワ市の市長ディランは、ルモワンの「文化的」な点のある程度認めるも問題にはせず、数値と共に郊外の失業問題を指摘している。両者の争点はそれぞれ異なるものの、それらが「暴動」に関する質問への答えであることを考えると、共に「暴動」を経験した市の代表でありながら、「問題」とみなすものの対象に大きな違いがあることが分かる。つまり、ルモワンは「統合されるべき者(=外国人)」を、ディランは「排除される(=失業率に苦しむ)若者」を「暴動」の「問題」点としている。

4.2. ジル・プーの視点

次に、モンフェルメイユ市から北西へ約15km離れた、ラ・クルヌーヴ市¹⁰⁾市長のジル・プーの発言を取り上げる。プーは1996年に市長となり、2002年に再選、2008年にも再選され、現在3期目を務めている。所属政党は社会党である。また、セヌ＝サン＝ドニ県およびイル＝ド＝フランス地域圏のコミュニケーション共同体の副代表も務めている。尚、インタビューはルモワンと同時期に行われている。

ここでは主に、彼が市民や警察関係者、副知事らと行った会談でのやり取りを中心にみていきたい。

以下に挙げるのは、プーがある市民団体が主催する集会に招かれた際の対話の一部である。そこでは、参加者の市民から「暴動」の背景にある問題点が指摘される。

参加者a

彼ら（若者たち）は政治が自分たちに何もしてくれなかったと考えています。何よりもまず、クルヌーヴに住んでいると仕事を見つけるのがとても難しいです。日雇いの仕事はありますが、若者たちは[中略] 正規で雇用されません。

参加者b

学校の問題を取り上げて下さい。望まなかった職種で、BEPやCAPなどに登録した人はたくさんいます。結果的に、彼らを待っているのは確実な挫折です。

参加者c

警察による挑発行為もあります。顔つきに対する監視や、地区の外へ出ようとする時の警官による圧力など、それらはみなあんまりです。いつかそのうち、彼らは私たちをおかしくするでしょう。

3人の参加者はそれぞれ、雇用問題、就業問題、警察の問題を指摘している。とりわけ、雇用と就業は繋がりがあがる。BEP及びCAPは中等教育において取得できる職業免許¹¹⁾であるが、それらはディプロマ・システムの中で最も下位に置かれており、選択できる職種が少なく、就業できる可能性が非常に低い。それは、「正規で雇用」されない状況を招き得るものである。

3人目は、警察の「挑発行為」を非難している。「顔つきに対する監視」とは、レイシズムとも言える対応である。この指摘に対しプーは次のように答え、理解を示している。

市長

警察の挑発に関しては、あなた方のおっしゃる通りだと思います。しかしながら、私はとりわけ年頭所感において、警察署長に対して何度か、もし警察官たちが人々に対して異常な振る舞いをすれば、自らの仕事を傷つけている訳ですから、それは誤りである、と言いました。

この発言からは、プー自身も警察の「振る舞い」が問題であると認識していたことが明らかとなっている。

雇用に関しては以下のような指摘もある。

参加者d

市長さん、私はオレンジナ、ブイグ、ユーロコプター¹²⁾のような会社が市内に置かれているのに、どうして私たちにはいつも仕事がないのかが理解できません。

参加者e

肌の色や住所が原因で私たちに仕事を与えないこれらの会社に、あなたは本当に何も言えないのですか？それでもあなたは市長です。何もせずにはいられないはずですよ。

参加者dが挙げる会社名は、フランスの大手企業であり、ラ・クルヌーヴ市に大規模な工場を構えている。しかし、ここでの発言によれば、そうした企業が地域に雇用を生むことはなく、それどころか、「肌の色」や「住所」——「郊外」に住んでいるということ——によって就業差別が行われているという。これに関して、市長は次のように答えている。

市長

ユーロコプターの経営者は、市に根付いたやり方で活動するのを拒否しました。というのも、彼によれば、彼らの生産活動領域はデリケートで、クルヌーヴの若者たちでは働けないからだそうです。彼は暗に、それは彼らの血統が原因であると言っていました。

ここには、明らかなレイシズムが指摘されている。つまり、若者たちは「血統」の問題を抱えているために、「デリケート」な仕事には従事できない。重要な点は、そうしたレイシズムの存在以上に、市長がそれを認めているというところにある。それだけに、市民らが訴える雇用問題の深刻さを窺い知ることができる。レイシズムについては、さらに2人からの発言がある。

参加者f

市長、あなたは何も提案していません。目を開き、我々が生きているところに目を向けて下さい。フランスにはあまりに多くの差別、レイシズムがあります。

団体代表

みなさんは悲観的になってはいけません。フランス社会に根付いたこのレイシズムと闘わなければならないのです。他に解決方法はありません。小石を投げたり、車に火をつけたりするのは何の意味もありません。

彼（女）らから繰り返される差別への言及は、それが「暴動」の大きな原因を為していることの表れだと言えるだろう。団体代表者は暴力行為を否定しながら、レイシズムとの闘いを強調している。郊外の「若者」がレイシズムを被ることは、彼（女）らがフランス社会において「異質」な存在と見なされていることの証左である。

集会の後、プーは以下のようなコメントを出している。

彼らの生活状況は荒廃しています。[中略] 住民たちは捨てられたという感覚を持っています。私は、この地区の人口の [中略] 3分の1を占める20歳以下の人々のことを思い、こう自問します。「この地区に対して、彼らはどんな未来を望んでいるのだろうか？」と。私たちの責任は重大です。

一連のやり取りからは、差別の問題に理解を示し、尚且つそれを改善すべきだと考えるプーの姿勢を読み取ることができる。非行行為を「鎮圧」しようとする意図は彼にはみられない。市民との対話が前提となっただけであるが、先に挙げたルモワンの立場とは相反するものである。

5. 関係者の語り

5.1. ヴァンサン・カッセルの視点

ここではまず、映画監督で俳優のヴァンサン・カッセルのコメントを取り上げる。カッセルは、パリ郊外を舞台とした、警官と対立する若者たちの蜂起を描いた映画『憎しみ』¹³⁾に主演した経験を持つ。劇中で彼は、友人に暴行を加えた警官に「憎しみ」を抱いていた。こうしたことから、彼は「郊外」の問題についてしばしばコメントを求められている。以下に引用するのは、「2005年秋」に関しての発言である。

昨年私たちは、自らを理解させるために街頭に出た多くの若者たちを見ました。かなり突然だった反響の効果は、フランスのあらゆる地区に広がりました〔中略〕。

2005年11月、2人のガキが警察に追いかけて……。理由がなんであろうと、彼らは死にました。

〔中略〕このような惨劇の結果、私たちは、指導者たちの口から漏れたかなりの挑発的な言葉を耳にしました。我々は、そうした挑発的な言葉が、全てを壊すために通りに出て来る若者たちの大部分によって声高に叫ばれた文句よりも、結局ほとんど意味がないという事を考える権利があります。

彼はまず、「暴動」について、若者たちが「自分らを理解させるため」に行動したと述べている。言い換えれば、彼が手段としての「暴動」を理解しているということである。一方で、指導者たちによる「挑発的な言葉」——「ゴロツキ」発言はその1つであろう——を問題にしている。そして、そうした言葉よりも、若者たちの「文句」に「意味」があったと述べている。

暴力行為そのものについては、次の点を指摘している。

あらゆる所から、最も悪意のあるものが、急進イスラム主義あるいは極右のプロパガンダを広めようとした状況の中で、全てを混同せず、最終的に若者たちの目をまっすぐ見ることは、かつてないほど賢明であると思われれます。というのも、我々のメディアがほとんど強調しなかったことは、全国の破壊行為を働いた者の年齢の平均です。大部分が12歳から20歳の間でした。私にとっては事実が何であれ、「若者」によって犯された行いと、大人として責任のある者によって為された行いとの違いを説明する義務があります。そして、暴力が許容できるものでも解決方法でもなかったとしても、それは結局無力という深い意識の最も基本的な告白でしかありません。

ここでは、背景を見ずに「暴動」という行為を取り上げることが批判されている。その理由として、「暴動」に参加する「若者」の年齢や、彼（女）らと「大人」との区別について触れながら、「若者」と自らの行為に責任を持つべき人間との立場の違いを挙げている。但し、だからと言って、彼は「若者」による非行行為を正当化している訳ではなく、「暴動」という現象だけであらゆる要素が混同されてしまうことを問題にしている。また、「暴動」についてそれが「無力」からくるものだと指摘している。

そして、カッセルのコメントは、次のように締めくくられている。

多くの人々にとって悪くないフランス——伝統の国——は変わりました。その顔つきは変わってしまいました。言葉の最も高貴な意味で、新しい事柄は非常に多民族的です。我が国は彼らの子どもたち全てを認識する義務があり、彼らを理解する義務があります。〔中略〕これが事実であり、彼らは私たちの力なので、それを早く理解しなければなりません。

ここでは、カッセルが「若者」という存在をどのように捉えているのかを知ることができる。つまり、それは「多民族的」——「高貴な意味で」という前置きが、こうした議論のデリケートさを物語っている——な人々の「子どもたち」であり、彼（女）らはフランス社会において「認識」あるいは「理解」されていない、ということである。ここでの「多民族的」という言葉には、フランスに「出自」を持たない、というニュアンスが含まれていると言っていいだろう。しかし、彼はそれらを否定的に捉えることはなく、「力」であるとしている。

彼の「暴動」に対する姿勢は2点に大別することができる。まず、「当事者」としての「若者」の存在を想定している点、次に、「若者」（の一部）を「移民系」として認めている点である。発言をみれば、カッセルは「暴動」を社会問題として認識し、「当事者」たちの異議申し立てに理解を示していることがわかる。一方で、彼のこうした姿勢は、「若者」を「異質」な存在として否定的に価値付ける言説と同一のものである。つまり、これまでに見たように、「若者」を「排除」の観点から語る人々も、それを実体視し、「出自」（属性）を問題にしていた。

カッセルの発言からは、「若者」をどのように捉えているか——包摂の対象としているか、あるいは排除の対象としているか——に関係なく、「若者」の実体視というレベルと、「異質性」の強調というレベルで、「暴動」をめぐる言説には共通点があることが分かった。

5.2. ジャメル・ブセタの視点

ジャメル・ブセタは、2007年3月にフランス国家警察から解雇処分を受ける。「守秘義務違反」がその理由であったが、それは彼が、郊外に「介入」する警察が人々にレイシズムを働き、暴力的な取締りを行っていることを告発したことへの対応であった。

処分を受け、ブセタは警察の問題点を次のように指摘している。

2003年に警察学校に入ると、私はすぐに周りの人間たちの動機に驚きました。何人かは、恨みを晴らすために警察官になりたかったのだと言います。彼らの父親は黒人やアラブ人たちに襲われました。

学校を終えるころになると、全ての人間が疑わしい奴に思えてきます。とりわけ、北アフリカ人や黒人のことを。非行行為に関する統計結果を膨らませるのが彼らであるということを口実にして、彼らを徹底的に制圧するという命令を受けます。[中略]白人、中国人、あるいはほとんど監視されることのない他の人間を除いて！

私は若者たちと彼らとの間の溝を広げることについては警察官に責任があると確信しています。彼らの身元検査、嘲笑、軽蔑的な視線、短絡的な考え[中略]などなど…。

警察官は市民をより尊重しなければなりません。[中略]より冷静に若者たちといるだけで十分です。

彼は、非行行為に取り組む警察官たちが抱くレイシズムを告発している。そこでは、ほぼ「監視」されることのない人々がいる一方で、「とりわけ、北アフリカ人や黒人」が「制圧」の対象とされている。そして、若者と警察との対立関係については、警察側の責任を明言している。具体的には、警察官たちの態度と「尊重」の欠如が問題とされている。ブセタのコメントは、これまでも言及のあった警察の「介入」の実態を明らかにしている。

ここでは、「彼ら」（警察）に対する「若者」という位置付けが為されているが、彼の指摘によれば、「若者」はレイシズムの対象となっている。そして、警察官たちの中では、「若者」という存在として、*«race»*——「出自」や身体的特徴から判断されるもの——に基づいた「黒人」、「アラブ人」、「北アフリカ人」などが想定されている。問題となるのは、それらが「白人」や「中国人」、「その他の人間」とは異なり、「制圧」すべき者として価値付けられている点であろう。無論、ブセタの指摘が「若者」の全てを語っていないにしても、警察官たちのレイシスト的な意識が、彼（女）らの「若者」像の構築にある程度影響を与え、人々との対立を生んでいると考えることができる。一方でブセタ自身は、「若者」

を「市民」と同列のものとして認識していると思われる発言をしている。

5.3. オリヴィエ・クランの視点

最後に、クリシー＝スー＝ボワ市助役のオリヴィエ・クランの発言を引用する。市の政策決定者という立場から、彼は以下のように問題点を挙げている。

2人の子どもは恐ろしい状況下で亡くなりました。しかしながら、国家は真の同情を示すことはなく、諸々の証言の真実性を疑いました。そのことは騒擾の原因となりました。

住民たちの将来的展望の欠如、排除の感覚、不衛生な住居、働き口の欠乏、交通機関の不足、若者の雇用削減、統合という約束事を守らない学校、そして、あまりに恐怖を与える警察——それを避けるため、人々は生活を危険に晒す用意ができています——、などがあります。この街は一触即発の火薬庫となってしまいました。今日、僅かなことが変わりました。住宅、雇用、差別または交通機関の諸問題は、全て国家の管轄となっています。私たちは、学校施設、学休期の諸々の活動の運営、社会支援に関してしか行動できないのです！

反乱の直後の私たちの使命は、公権力にクリシー＝スー＝ボワ市の困難を喚起することでした。私たちは、請願書への署名によって住民たちをこの行動に参加させました。そして、内務大臣から警察署の建設通知を手に入れました。それは良いことです。私たちは30年間もそれを要求していました。しかし、それが2005年秋の動乱に対する唯一の答えだということは、不幸であるでしょう。

「2005年秋」において、最もメディアの注目を浴びたのがクリシー＝スー＝ボワ市であった。市の「暴動」そのものの規模が著しい訳ではなかったが、少年の死や「証言の真実性」に関する論争——「警察官の追跡行為」の有無が問われた——を経験したことで、市は象徴的に「2005年秋」の舞台となった。

従って、事件後は政策的に一層の取り組みが為されていたと考えられるが、クランの発言から分かるように、主な政策は国家の権限の下に置かれた。特に、住宅、雇用、差別といった、ここまでの分析で確認された「郊外」の主要な問題が、全て地元自治体の手を離れている。さらに、政府に対する働きかけも、警察署の建設という成果しかもたらしていない。クランの発言は、「展望」、「排除」、「住居」、「雇用」、「学校」、そして「警察」の問題について、この時点では進展が無かったことを意味している。

6. 「語り」の特徴

前項では、5人の人物による「2005年秋」に関する発言を取り上げた。ここではまず、彼らの「語り」から、それぞれの議論において特徴的なキーワードを挙げる。そして、そこから何が「問題」とされたのかについて考察する。

キーワードについては、以下のようにまとめた。また、6人目の視点として、プーとの対話に参加した住民たちを加えた。

- ①ルモワン：暴徒，処罰，司法，治安対策，危ない犬，文化レベル，民族的大変動，外国人家族，フランス文化に適応
- ②プー：警察の挑発，捨てられたという感覚
- ③カッセル：自らを理解させる，挑発的な言葉，混同，「若者」，無力，責任，大人，多民族的，理解
- ④ブセタ：北アフリカ人，黒人，レイシズム，警察官に責任，尊重
- ⑤クラン：将来的展望，排除，不衛生な住居，雇用削減，学校，恐怖を与える警察
- ⑥住民：正規で雇用（されない），学校の問題，確実な挫折，警察による挑発行為，いつも仕事がない，肌の色や住所が原因，あまりに多くの差別，レイシズム，社会に根付いたレイシズム

これらから、「暴動」の問題点を大きく2つの観点に分類することができる。1点目は、「暴力的」，「文化的」，「民族的」な問題として、それを「反社会的」な現象として非難するもの、2点目は、「(メディアによる)問題化」，「(権力による)抑圧」，「差別」を原因とした、「社会的排除」の問題としてそれを捉えるものである。

そして、郊外の「若者」たちは、どちらの観点においても当事者であり、一方では彼(女)らが「排除」すべきものとして、他方では「包摂」されるべきものとして語られている。

7. まとめ

本稿では、「2005年秋」における「若者」たちに関する言説を提示し、分析を試みた。但し、ここでの目的は言説として表れた言葉そのものを問題にすることではない。CDAの立場は、WODAK(2001)が言うように、言語それ自体の「問題性」ではなく、「エリート」によるその「使用」がそこに「権力」を与えることに着目している。

従って、ここでは前項で示した2種類の「問題点」を

前提としながら、より「権力」を帯びた形で用いられる言説、即ち社会的影響力のより強い言説がそのどちらにあるのかを明らかにすることで論を結びたい。

確かに、「包摂」の対象として「若者」を語る言説は多く、それらは「暴動」の反社会性を批判するものよりも主張が明確である。そこでは、抑圧や差別の現状が具体的に語られており、暴力行為の「鎮圧」だけを目的とする発言よりも説得性を持っているようにみえる。

それでも、「暴動」が「移民問題」として語られ、また「郊外」やそこに住む「若者」たちが「異質」な存在として実体視され、議論される——1990年代以降、「郊外問題」への対策は、人々を「統合¹⁴⁾」するという目的で行われることが多い——現状を踏まえれば、「暴動」を「反社会的」な現象として捉える言説がより「権力」を持っているといえる。

ヴァン・デイクは、「エリート」が「私はレイシストではない、しかし彼らは……」といった言い回しを用いて、排斥的主張を正当化することを「否認のストラテジー」と呼んだ。本論で引用した言説でいえば、「若者」への対応を正当化するために、「あるべきフランス社会」に対する「暴動」の「異質性」を強調するものが正にそれである。しかしながら、そこでは、「若者」が何者であるのかについては明らかにされず、「若者が問題である」という「語り」だけが実践される。従って、言説実践による「差異」の構築によって、より「権力」を帯びた言説が、「若者」を「排除」すべきものとして社会問題化している。

付言すれば、「暴動」——「抵抗」や「異議申し立て」ではなく¹⁵⁾——や「統合」というターム自体が、「当事者」が社会の「外部」に位置付けられた存在であることを前提としており、このことは、「若者」(あるいは「郊外」という存在、およびその異質性が自明のものともみなされ、結果として、「暴動」が特定の社会集団(あるいは地域)の「問題」として認識される状況を生み出しているといえる。

【参考文献】

- ヴァン・デイク，テウン（2006）「談話に見られる人種差別の否認」『「共生」の内実 批判的社会言語学からの問いかけ』植田晃次・山下仁編，三元社。
- 中條健志（2009）『「若者」はどのように語られたか—2005年秋の「暴動」をめぐって』*Revue japonaise de didactique du français*, Vol.4, *Études francophones*, SJDF.
- 鶴巻泉子（2006）「メディアと「都市暴力」ストラスブールの車放火事件から見た都市暴動という「公共問題」の構成」『フランス暴動—階級社会の行方』現代思想vol.34-3，青土社。
- 野呂香代子（1996）「円滑な関係をめぐる言語活動の会話分析」『追手門経営論集』Vol.2, No.2，追手門学院大学経営学部。
- 野呂香代子（2009）「クリティカル・ディスコース・アナリシス」

- 『「正しさ」への問い ―批判的社会言語学の試み』野呂香代子・山下仁編, 三元社。
- BASTIÉ, Jean (1964) *La Croissance de la banlieue parisienne*, PUF.
- BATTEGAY, Alain et BOUBAKER, Ahmed (1992) « Des Minguettes à Vaux-en-Velin. Fractures sociaux et discours publics », in *Les temps modernes*.
- BATTEGAY, Alain et BOUBAKER, Ahmed (1993) *Les Images publiques de l'immigration*, CLEMI/Harmattan.
- BELMESSOUS, Hacène (2007) : *Maires de banlieue*, SEXTANT.
- CHAMPAGNE, Patrick (1991) « La construction médiatique des malaises sociaux », in *Actes de la recherche en sciences sociales*, décembre 1991, n.90.
- CHOMBART DE LAUWE, Paul-Henry (1965) *Des Hommes et des villes*, Payot.
- DAGNAUD, Monique (1978) *Le Mythe de la qualité de la vie et la politique urbaine en France*, Mouton.
- GEISSER, Vincent (2003) *La nouvelle islamophobie*, La Découverte.
- HAUT, François & HOPE, Henri (2007) Les violences urbaines de novembre 2005 : une affaire de bandes ?, *La violence des mineurs*, Cahiers de la sécurité, n.1, INHES.
- JAZOULI, Adil (1992) *Les Années banlieues*, Seuil.
- LY, Amad & GAY, Marion (2007) *Parole de jeune ; J'ai mal à ma France*, Chronique sociale.
- MAUGER, Gérard (2006) *L'Émeute de novembre 2005. Une révolte protopolitique*, Croquant.
- MILLS-AFFIF, Édouard (2007) « Vu à la télé. La saga des immigrés », in Rigoni, *Qui a peur de la télévision en couleurs? La diversité culturelle dans les médias*, Montreuil.
- SEDEL, Julie (2009) *Les médias et la banlieue*, Bdl éditions.
- VAN DIJK, Teun A. (1988) *News as Discourse*, Erlbaum.
- VAN DIJK, Teun A. (1991) *Racism and the Press*, Routledge.
- WODAK, Ruth (2001) « What CDA is about - a summary of its history, important concepts and its developments », in Wodak & Meyer, *Methods of Critical Discourse Analysis*, Sage.

注

1. 言説とそれが帯びる「権力」の問題を考える上では、必ずしも政治家や官僚、研究者といった「支配層」が「エリート」である必要はない、という点を補足しておきたい。本稿では、政治家の発言の中に「排除」に関わる言説が比較的多く確認されたことから、彼らを便宜的に「エリート」と呼んでいる。
2. Clichy-sous-Bois : セヌ=サン=ドニ県のコミューン。面積は3.95平方km。人口29,412人(2006年)、コミューン(commune)はフランスの地方自治体の最小単位。日本の市町村にあたる。ここでは便宜的に「市」と訳す。
3. 対話は2006年9月から2007年1月にかけて行われている。
4. 無論、メディアで取り上げられるあらゆる「言説」は、編集・加工された「メディアの言説」である。従って、ここで用いる著作に掲載されている「個人の発言」も、それ自体が「著者の言説」であることを認識しておかなければならない。
5. Montfermeil : パリ市の北(約17km)に位置するセヌ=サン=ドニ県のコミューン。面積は5.45平方km。人口26,161人(2006年)。
6. Union pour un Mouvement Populaire : 2002年に設立した保守右派政党。ジャック・シラク(前大統領)支持の与党として出発。ニコラ・サルコジの所属政党。
7. いわゆる「出生地主義」を採るフランスで生まれた者は自動的に「フランス人」となる。
8. フランス郊外の都市化は1950年代に始まる。そこでは、高度経済成長(1945-1975年)を背景とした、農村部から都市部への人口移動や国外からの移民労働者の移住に対応するため、主要都市郊外に住宅団地が多数建設された。やがて景気が後退すると人々は労働市場から排除され、デモなどを通じた彼(女)らの異議申し立てが行われる。しかし、そこで移民労働者やレイシズムの問題が強調されたことから、「郊外問題」が「移民問題」と混同されるようになる。「郊外」あるいは「暴動」が、「移民」や「外国人」と関連付けられる背景の1つはここにある。但し、副大統領の発言が、「移民」や「外国人」の排除を前提にしているとするれば、一面的理解によるものというより、むしろそれはレイシズムである。
9. 出自を直接国外の地域に持たない「第二世代」以降の人々が「移民(系)」と名指され、「排除」や「排斥」の対象になるという現象は、フランスに限らず多くの地域で見られる。
10. La Courneuve : セヌ=サン=ドニ県のコミューン。面積7.52平方km。人口37,034人(2006年)。
11. BEP(職業教育終了証書, brevet d'études professionnelles)は1967年に創設された中等教育及び職業教育のディプロマ。特定の職業技術の保持を証明する免状。CAP(職業適性証書, certificat d'aptitude professionnelle)も基本的にはBEPと同様だが、職種がより限られている。
12. Orangina : 大手飲料メーカー。主にヨーロッパと北米で販売されている同名の清涼飲料が有名。Bouygues : 1952年創設のフランスの建設会社。パリ証券取引所に上場し、CAC40構成銘柄の1つ。建設、住宅販売業を展開する。郊外団地の建設も行った。主なグループ会社として、TF1(フランスのテレビ局)、ブイグテレコム(携帯電話事業者)などがある。Eurocopter : エアバスなど子会社としてもつEADS(欧州航空宇宙防衛会社)の完全子会社。1992年設立。民間、軍用双方のヘリコプターの製造・サポートを行う。世界シェア40%(2001年)。
13. La Haine : マチュー・カソヴィッツ監督作品。1995年公開。
14. フランスの移民政策に関する議論では、1980年代後半頃までは「同化」(assimilation)というタームが用いられていたが、それ以後は「統合」(intégration)がそれに代わっている。「同化」と異なり、個人の「異質」な「文化的要素」が否定されることなく、当該社会との間で相互に価値や理念が融合される状態を指す「統合」ではあるが、「異質」な存在を前提としている時点でその同化主義的要素は否めない。因みに、「2005年秋」を報道した日本のメディアの多くは、フランス社会に「同化」できない「移民」の問題を指摘していたが、こうした姿勢は日本社会の「移民問題」に対する認識のレヴェルの低さを物語っている。
15. 暴力的側面が強調される「暴動」というタームだけでなく、「抵抗」、「異議申し立て」、または「蜂起」という言葉が使われる場合もある。しかし、それらの多くは事件の当事者から発せられるもので、「エリート」の語りにはほぼ見られない。

Discourse on “the young” in French media: -discourse exclusive about “unrest”

Takeshi CHUJO

Riots in French suburbs have been labeled a major problem in France. While the English word “suburbs” brings forth connotations of a comfortable life, the word “banlieue” in French does not. Since the 1980s much public discussion has focused on this topic, and now violence, integration and social exclusion of “youths” have been added to the discussion. In the autumn of 2005, a number of riots took place in various cities, and numerous discussions on the incidents ensued. This paper examines these discussions through the use of Critical Discourse Analysis, which examines the relationship between discourse and its influence on social inequality. For this, the selected discourses were from two categories: that of the elites (politicians) and that of the concerned persons (those who complain or denounce the problems of “riots”). To sum up this analysis, “youths” are considered objects of exclusion (dissocial existence) or inclusion (discriminated existence). In conclusion, the discourse of the elites, which exerts power when made public, justifies the violent aspect of “riots”, violent intervention of the police, and exclusion of “youths” by emphasizing their heterogeneity.

Keywords : the suburbs, unrest, media discourse, social exclusion, Critical Discourse Analysis